大学生の未来イメージの変化

—東日本大震災が及ぼす影響—

佐藤舞

(早稲田大学大学院文学研究科)

キーワード：社会的雰囲気・時間的展望・特性的自己効力感

The change of undergraduates' time attitude toward their future.

Mai SATO

(Graduate School of Letters, Arts, and Sciences, Waseda Univ.)

Key Words: social climate, time perspective, generalized self-efficacy

目 的

東日本大震災の影響は地震や津波による直接的なものだけではなく、全国まで波及した。放射性物質漏洩による農畜産業への打撃、衣食住の安全の崩壊、原子力発電所停止による電力供給不足への懸念、さらには発電用燃料輸入の急増に対する輸出業の不振と、震災により発生した社会の混乱は日本経済に甚大な影響を与えた。2011年の貿易収支は赤字に転落し、今後も日本経済は停滞していきだろうといわれている。

一連の不安定な社会状況はまた、社会成員に集合的に共有される社会的雰囲気にも影響を及ぼすと考えられる。社会的雰囲気は社会的諸条件に規定されて集合的に形成されるため、東日本大震災に起因する社会状況の変化を体験する以前と以後とでは、社会的雰囲気も異なるであろう。具体的には、世相の悪化とそれが持続するという未来予測は、今後の日本を担っていく若者の未来イメージを悪化させると思われる。

この未来イメージと関連する概念に特性的自己効力感がある。さらに、未来に関する感情と特性的自己効力感は主観的幸福感とも関連することが示されている(森・福島, 2008)。

本研究では、特性的自己効力感が未来の主観的幸福感と未来イメージの双方に影響し、主観的幸福感が未来イメージに影響するというモデルを作成する(Fig. 1)。このモデルについて、大学生を対象として2010年度と2011年度の同時期に調査を行い、東日本大震災以前と以後で差があるか、あるとすればモデルのどこにどのような差が見られるかを検討する。

方 法

調査時期 調査は2010年11月下旬～12月上旬、および2012年1月～2月の2回にわたって実施した。

調査協力者 都内の大学4～5年生208名の回答を得た。調査年別内訳は2010年度で144名(男性68名、女性76名)、2011年度で64名(男性27名、女性37名)であった。年齢は21～25歳($M=22.14$, $SD=0.73$)であった。

質問紙の構成 ①特性的自己効力感尺度：成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田(1995)による1因子23項目の尺度を用いた。②人生満足度尺度：未来における主観的幸福感を測定するため、Diener, Emmons, Larsen, & Griffin(1985)による the Satisfaction With Life Scale (5項目)を使用した。本研究では「あなたの10年後の姿を思い浮かべて回答してください。」と教示した。③未来イメージ尺度：都筑(1999)が作成した時間的態度尺度の未来イメージのみを使用した。SD法尺度で15の形容詞対からなり、1因子構造が確認されている。「あなた自身の未来について」当てはまるものを選択するよう教示した。回答はポジティブなほど高くなるように得点化した。

結 果

仮説モデルについて、母集団別モデル、配置不変モデル、測定不変モデルの適合度を検討したところ、測定不変モデルで最も高い適合度を示した。よって測定不変性が確認された

ため、多母集団の平均共分散構造分析を行った。

まず測定不変モデルに基づいて2010年度群の因子平均と切片を0に固定し、2011年度群の因子平均と切片を自由母数とした。以下、因子間のパス係数および因子平均と切片の制約の組み合わせを変えたモデルを複数作成し、適合度を検討した。その結果、パス係数に群間で等値制約をおき、未来イメージの切片のみを推定したモデルの適合度が最も高かった($CFI=.999$, $RMSEA=.010$, $AIC=152.272$)。得られたモデルをFig. 1に示す。以上より、構成概念間の影響関係は調査年度による差が見られず、未来イメージの切片のみ、2011年度群の方が2010年度群よりも有意に低かった($z=-3.74$, $p<.001$)。

考 察

未来イメージの切片について2011年度群の方が2010年度群よりも有意に低いという結果から、2011年度群の方が自分の未来をネガティブにイメージしていると示された。これは東日本大震災後の世相の悪化を反映していると考えられる。ところが、未来の主観的幸福感では有意差が見られなかった。東日本大震災以前よりも未来を悲観的に予測してはいるものの、自分の人生は素晴らしいものになるだろうという予測には震災以前と以後で変化がないといえる。すなわち、若者は自分の未来に降りかかる困難を予測してはいるが、決して絶望してはいない。このようなポジティブ幻想は、復興までの長い道のりが予想される日本で適応的に生きていくためには重要であろう。また、特性的自己効力感の因子平均にも、特性的自己効力感から未来イメージへの影響にも、有意差は見られなかった。よって、個人が有する特性的自己効力感は世相の変化にかかわらず変化せず、未来の主観的幸福感と未来イメージへの影響力を持ち続けると示唆された。

注1) すべてのパスは0.1%水準で有意。

注2) 図中の値は2010年度群/2011年度群の標準化推定値を示す。

Fig.1 分析結果